

北海道師範塾 「教師の道」 塾頭通信

第637号 平成25年11月5日

いささか冷たくはないか

8月に出された名古屋地方裁判所の判決は、高齢化が進み、老老介護が当たり前の社会状況の中で、認知症患者を家族で介護する事の難しさを改めて示すものとなっています。

事の起こりは、2007年12月、愛知県大府市の当時91歳の男性が、同居している要介護1の当時85歳の妻（85）のまどろむ間に外出し、東海道線共和駅で線路に入って電車にはねられ死亡したというものです。

なお、この男性は2000年頃から認知症の症状が出始め、2007年2月からは要介護4と、常に介護が必要な状態となっていました。事故当時は、週6日デイサービスを利用、85歳の妻と、介護のため横浜市から近所に転居した長男の嫁の介護も受けていたといえます。

JR東海は、今回の事故に対して遺族側に損害賠償を請求、一方遺族側は、事故は予見できなかったと主張し、裁判で争っていたものです。

この裁判で、名古屋地方裁判所は、医師の診断書等から男性の徘徊は予見出来たとしています。そして、家に併設する事務所出入り口のセンサー付きチャイムの電源を入れる等の対策をせず、妻も目を離す等注意義務を怠った結果、男性が第三者に損害を与えたものであり、遺族はJR東海に対し約720万円を支払う様命じています。

遺族側は控訴していますので、議論は今後更に引き続く事になりますが、何とも遣り切れない思いがします。

遺族側は「常に一瞬の隙もなく見守る事は不可能で、家族としてはやれる事は全てやって来た」と主張しています。

親が認知症にかかっているその介護をしている家族の方は、多分同じ思いで今回の一連の顛末を見ている事と思います。

一方、JR東海の立場からすれば、列車の運行に支障が生じ損害を被った以上、その損害を原因者に請求するのは当然といえます。ただ、鉄道事故にも色々ある筈で、今回の様に認知症患者が偶然に線路内に紛れ込んで事故が発生したというケースは、原因者に何らの悪意がある訳ではありませんので、自然災害による事故と同じように扱うという配慮は取れなかったものかと思えます。

徘徊癖のある認知症患者は、常に誰かが付いていないと何処に行ってしまうか分

からない、しかも本人は、自分が誰で、何処にいるかという事が分かりませんから、一旦行方が分からなくなると探すのが大変です。

施設に入所している場合であれば、複数の目で確認していますから、大事に至る事は少ないと思いますが、家族の場合は、介護する人が限られていることもあり、介護する家族の負担は非常に重たくなります。

今回の事故に至る経過を見てみると、誠に不幸な事故というべきで、家族に全ての責任を負わせるというのはいささか酷ではないかと思います。しかも、要介護1の85歳の妻の責任を問うというのは、余りにも冷たいのではないのでしょうか。

もしも、完全に、事故を起こさない様にするとなれば、施設する等して家から一歩も出られない様隔離せざるを得なくなります。そんな風に、家庭が収容施設化してしまうというのでは、何の為の自宅介護かという事にもなりかねません。

また、もっと懸念される事は、介護する家族の責任と負担が重くなる事で「自宅での介護はしない方が良いのではないか」といった風潮が広がる事です。

今回の事故に関していえば、JR東海側は何ら責任を問われていません。勿論、現実の問題としては、線路に関係者以外誰も侵入出来ない様にするというのは極めて難しいとは思いますが、それでも、認知症の患者が簡単に線路に侵入出来てしまった事は、JR東海側にも危機管理上全く問題はなかったといい切れるものなのか、疑問は残ります。

近年、認知症の患者を自宅で介護している人や老老介護の状況に置かれている人が増えています。こうした方々は、経済的にも肉体的にも大きな負担を強いられています。こうした中で、不幸にして今回の様な事故があった場合、遺族は家族を失った悲しみに加え損害を賠償しなければならないという二重の苦しみを背負う事になります。

今回の判決に対して批判的な意見が多く出されていますが、それは認知症患者を介護する家族の窮状を顧慮している様には見えない事にあるといえるでしょう。つまり、鉄道会社が被った損害は補填しなければならないとしても、それを全て遺族の責任に転嫁するというのはいささか冷たく、また、厳し過ぎはしないか、というのが多くの方々の共通の思いではないのでしょうか。

認知症患者は年々増え続け、今や推計で460万人を超えるといわれており、今回の様な事故が今後も起こる可能性は否定できません。

とすれば、今後も今回の様な不幸な事故が起こり得る事を想定し、認知症患者を介護している家族に対するサポート体制の充実に加え、新たな保険制度や第三者による救済機関の創設等について検討する必要もあるのではないかと考えています。

(塾頭：吉田 洋一)